

## 障害者の進学を後押し

大阪枚方市に住む重い障害のある新居優太郎さんの卒業から進学について、何回かレポートしてきた。障害のある子どもたちの小中から高校、そして大学への進学に関心がある。名古屋の中学2年生で人工呼吸器ユーザーの林京香さんと、長らく交流してきたからだ。障害のある子の高校進学そして大学進学には、残念ながら大きな壁がある。

フェイスブック仲間から、障害のある子の高校進学の厳しい知らせをもらい、腹を立てている。

そんなとき、図書館で大阪日日新聞 4月14日の標題記事を見つけたので、抜粋して紹介したい。

障害のある受験生のための全国大学ガイドが、小さな市民団体の手で作り続けられている。入学試験や学生生活で各大学がどう配慮しているかなど、詳細に現状を調べて掲載し、障害者の進学を後押しする。調査は大学側が体制を見直す契機にもなり、社会を変える可能性も秘める本だ。

このほど刊行されたのは「大学案内 2019 障害者版」。最初の1996年版から改訂を重ね、10冊目だ。「全国障害学生支援センター」（相模原市）の3人のスタッフが中心となり、編集・発行した。自身も脳性まひによる肢体障害がある殿岡翼代表は、障害者に向け「自分に必要な配慮と大学が提供する配慮を擦り合わせ、進路選択に活用して」と語る。

今回は17～18年に全ての大学など792校に協力を依頼。回答を得た247校のデータをまとめた。入試の試験時間の延長など、障害に応じた配慮をはじめ、在籍学生の障害の種類、入学後のサポートまで約200項目を調査した。……

全体として大学側の配慮は進みつつあるが、「入試制度は健常者の発想でできている。障害者が、大学の配慮の有無などで進学先を選択しなければいけないことは本来おかしい」と殿岡さん。学びたい時に学びたい場所で、自由に学べる社会の実現を求めている。

「大学案内」の次の調査は間もなくスタート。回答のため、教授会などで障害学生への対応を点検する大学もあり、ガイドを作る行為自体が障害者の学びの現状など社会を変える可能性がある。殿岡さんは「この本で大学の障害者支援も変わっていけば」と期待する。



(2019年4月24日)